瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば
年間第三十一主日Ａ年（２０２６年１１月１日）

主任司祭　小西　広志

第1朗読　黙示録7章2-4，9-14節
第2朗読　一ヨハネ3章1-3節
福音朗読　マタイ5章1-12a節

11月は「死者の月」と呼ばれていますが、むしろ、「終わりの時（終末）」を見つめる季節だと思います。「終わりの時」とは、自分自身の終わりとしての死と、また、この世界の終わりとしての世の終わりを指します。
11月の主日の聖書朗読も「終わりの時」を意識したものへと次第になっていき、そしてついに11月の最後の週（今年は11月22日）に教会は「王であるキリスト」を祝いながら、「終わりの時」に主イエス・キリストが再臨し、被造物を治めることを通じて、すべてのものが神のいのちにあずかるのだというわたしたちの信仰の核心を確かなものとします。
こういった「終わりの時」を黙想するようにと招かれている今月は、まず、諸聖人をお祝いします（11月1日）。聖人とは「心の貧しい人は幸い」というイエスの福音を精一杯生きた人々です。聖人たちはすでに天国にあって、主イエス・キリストの復活のいのちにあずかっている者らです。彼らは天国でキリスト共に父なる神への賛美の歌声をたえず響かせています。わたしたちも、諸聖人を模範としてこの世での信仰の旅路を歩めますようにと願います。

諸聖人の祭日の翌日は、今度はすべての死者を思い起こし祈りをささげます（「死者の日」）。死者たちは地上でのいのちを終えて、天国への帰還を目指して旅立っていきました。地上で生きるわたしたちが神を目指して信仰の旅路を歩んでいるのと同じように、ほとんど多くの死者たちも償いの祈りを唱えつつ天国へと歩んでいくのです。わたしたちは死者のために祈らなければなりません。亡くなられた方々が父なる神の慈しみと恵みの中で、神の御許へと至りますようにと。そして亡くなられた方々がこの世の向こう側から、今生きているわたしたちのために導きと励まし、執りなしをしてくださいますようにと。
こうして、「諸聖人の祭日」と「死者の日」を通じて、地上の教会は天上の教会と交わり、共に賛美の声を響かせていくのです。「交わり」という視点から「諸聖人の祭日」と「死者の日」について見ていきましょう。
教会には人との交わり、神との交わりが生まれます。教会での人と人との交わりは、わたしたちは体験済ですが、神との交わりについては体験しているはずですが、ハッキリとしていないのが現実ではないでしょうか。

わたしたちが生きている地上の世界の向こう側には、天上の世界があります。あの世、天国、天の国、神の国、楽園と言い習わしてきましたが、いずれにせよ、神がおられるところがあるのです。　そこでは、主イエス・キリストを中心に、すでにこの世から旅立った多くの人々が、聖母マリアさまと天使たちと共にたえず父なる神を賛美し、称えています。「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン」（黙7章12節）。これは天上の教会の賛美の声です。　地上にある教会、つまり、今ここにいるわたしたちの集まりは、この天上の教会の賛美の声に、自分たちの賛美の声を響かせて、神を称え、賛美するのです。人生の目的は、恵みを無償でくださる神への賛美と感謝です。わたしたちは生涯を使って、生涯を通じて神を称え、神に感謝をするために生きているのです。教会の目的も同様です。主イエス・キリストを通じていただいた神からの恵みに対して、いつも感謝し、その恵みをくださった父なる神に感謝をささげるのです。

しかし、残念ですが、わたしたち地上の教会がいくら華やかで、荘厳な典礼を献げても、声をかぎりに美しいメロディーで神を称えても、その声は天上におられる神のもとに届きません。なぜなら、わたしたちは罪人だからです。だからこそ、天上の教会の賛美の声に、わたしたちの貧しい賛美の声を響かせてもらうのです。こうして、天上と地上、二つの教会は一つになって、父と子と聖霊の三位の神を称えるという使命を果たせるようになるのです。ここに、地上と天上の大きな「交わり」が生まれていきます。

聖人たちは、立派な行いをした人、正しく生きた人だから聖人になったのではありません。神の側からの無償の恵みのおかげで、生きているときも死んだ後も、教会が示す「交わり」を生きようとしたから聖人なのです。諸聖人のミサでの神のみことばに聖人たちの姿が垣間見ることができます。「彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」（第一朗読：黙7章14節）。大きな苦難を人生の中で体験したのが聖人たちなのです。「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい」（第二朗読：1ヨハ3章1節）。聖人たちは神から愛された人々です。「心の貧しい人は幸い」（福音朗読：マタ5章3節）。神に頼って生きていかなければ、ひとときとて生きていけない。そんな自分の貧しさを聖人たちはよく知っていました。

「苦難を通って生きる」、「神から愛されて、神の子として生きる」、そして「神に頼って、心の貧しさを知って生きる」は何も聖人だけではないでしょう。わたしたちキリスト者の生きる姿そのものです。苦難がある。でも神から愛されていると信じて、神さまに頼って生きていくとき、わたしたちたちは知らず知らずのうちに、神との交わりを生きているのです。

「終わりの時」を見つめるようにと招かれている11月の死者の月。その始まりに天国での壮麗な賛美の歌声に思いを馳せるのは、いつか、わたしたち一人ひとりも地上での人生を終えて、この賛美の交わりの中に入れていただけるのだという希望へとつながっていくのです。